

『方丈記』『徒然草』における建築と都市空間

文学の中の建築 その1

○正会員 中川 景子¹
同 張 奕文²
同 近藤 正一³
同 早瀬 幸彦²
同 鈴木 雄一郎¹
同 若山 滋⁴

序

本論は、日本中世の代表的な随筆である「方丈記」と「徒然草」を取り上げ、そこに現れる建築空間と都市空間を分析することによって、空間像を探るとともに、既に発表されている「枕草子」における建築空間との比較により、平安王朝時代から南北朝時代にかけての建築と都市の心象空間の変遷について考察を行う。

1. 研究の方法

建築および都市空間を指す用語を、建築用語として抽出し、その用語を、次のように、建築要素と文脈要素の二軸によって分類し、考察する。

2. 『方丈記』『徒然草』における建築用語の概要と空間特性

抽出された用語のうち、頻度の高い建築用語を表-1に、建築要素と文脈要素の二軸による分類別頻度を表-2に示す。

方丈記において注目されるのは、建築全体を表す「建物」の頻度が圧倒的に高く、中でも、「家」が最も多いことである。また、都市空間については「路・道」と共に京中の災厄について多く記述している。方丈記においては「道・路」は都市の表情が感じられる舞台空間として意識されているように見受けられる。

徒然草において最も頻度の高いのは「家・家居」である。次に「車」が多く、「国」「門・御門」「庭」などが続く。また、文脈要素として人名を示す語は、「方丈記」では見られなかったが、「徒然草」では「殿」などの表現により見られる。美的対象としては、「庭」が多く、その中でも美的評価は「桜」「梅」に集中している。「徒然草」は、話題が多岐にわたっていることから、建築空間の描写も多い。「枕草子」「方丈記」の二作品と比べて様々な用途の建築が扱われていることが、これまでの随筆、評論文学にはなかったところである。また外部空間よりも、身近な空間、建築の内部空間が多く描かれており、家具、建具が多いことが注目されるが、「枕草子」の方が内部空間についての記述が細かいところに及んでいる。

3. 『方丈記』『徒然草』の空間美学と空間論

3-1. 『方丈記』の空間美学と空間論

『方丈記』の中で、「建物」に対する情感評価の用語のなかで最も多いのは「仮ノ」である。都の建物が「焼

ケル」「壊レル」といった記述も多くあり、直接的にも、間接的にも都の建物のはかなさが強く意識されているのに対し、方丈の庵の状態は、「静カナリ」と記述している。

「人」と「家」の無常観を論じている『方丈記』は、「人」については、生死、苦しみ、悩み、辛さを挙げ、「家」については、特に家とその中の資財・財宝の破壊・損失を述べて、そこからくる「心」の痛みを描き出している。そういった人の世の無常観から、逆に賑やかな空間、災厄の無常な人世を離れ、独自の静寂な庵を造り、簡素な空間から来る精神の自由という考えに到るのである。

長明の美意識の中で、「家」は凡俗な住まいの空間である。これに対して、「菴」は脱俗的な住まいの空間であり、精神的な空間の実現として現れている。

その方丈の庵は、「土地柄を心に選んで決めない」とか、「移り住むことにどれほどの苦労があらうか」とかいうように仮設的な建築であるが故の精神の自由を強調している。

3-2. 『徒然草』の空間美学と空間論

兼好は、「徒然草」の中で、筆者個人の独特な興味と感覚と美的な基準によって、建築空間、生活様態を評価

表-1. 頻度の高い建築用語

方丈記		
建築用語	頻度	建築要素分類
家	33	建物
菴・草菴	16	建物
京	7	都市
栖	7	建物
都	7	都市
路・道	7	公共空間
車	6	その他
屋・居屋	5	建物
徒然草		
建築用語	頻度	建築要素分類
家・家居	49	建物
車・御車	18	その他
国・御国	16	国
門・御門・大門	15	建物
庭	15	庭
寺・寺院	13	建物
都・宮	13	都市
社・神社・御社	11	建物
調度・もの	11	家具

Urban and Architectural space in Hojoki and Tsurezuregusa

Arhitectural space in Literature part1

Nakagawa Keiko et al.

した。住居に対して、家の様子からそこに住む人が推定できる。住み手の一種の自己表現としてとらえていることが認められる。自然のままの素朴な空間が兼好の美意識にかなう住まい方である。「きららかならね」とする簡素美を求め、珍しさと派手を好む当世風を排し、古風な落ち着きとやわらかさを勧めている。

生活空間の域については、「明し」「暗し」「寒く」といった評価があるが、これは実用性に重きを置いた評価である。逆に、「用なき所を造りたる」を「見るもおもしろく」「よし」とし、「造りはてぬ所を残すこと」を「おもしろく」「いきのぶる」ともしている。建物においても不完全であることをよいと評価している。

家というものは、住人の性格に「つきづきし」建物は「興あり」とする人と住まいの調和を評価する感覚が読みとれ、「仮の宿り」の表現は「方丈記」を既に念頭に置いた文学感覚とも見受けられる。

4. 結論

以上の分析をもとに「方丈記」「徒然草」に現れる建築、都市空間の特質を、先に発表した「枕草子」との比較において総括すれば次のごとくである。

建築用語が登場する頻度を分析すると、「枕草子」と「徒然草」とにはかなりの共通点が見られる。「枕草子」において「上」「宮」などの人名を間接的に表現する建築用語が多いことを除けば、この二書に登場する建築用語はほぼ同様の傾向を示すのに対して、「方丈記」は、建築要素の分類において「建物」の頻度が圧倒的に高いという点で他の二書と異なっている。これは「方丈記」が、特に都に代表される俗世間を離れ、山間の仮住まいを人生の本質的な過ごし方として強く主張するという、単一的な内容の思想的な書であるのに対して、「枕

草子」と「徒然草」は、ともに章段構成を取り、広く建築、都市空間に関する様々な様態を評価する随筆であるところから当然のことであろう。

「方丈記」は、長明が脱俗しての山間の詫び住まいの正当性(妥当性と言うべきか)を主張するものであることは今更論ずるまでもないことであるが、単なる山間の詫び住まいに止まらず、明瞭な「仮設性」を主張していることが重要である。これは「万葉集」以来、和歌文学の中に受け継がれてきた「やど」の空間における「花の情緒」が、王朝時代の美学を通り越して「草庵」の思想に結晶化したものと思われる。日本文学における仮設的空間への志向は、「万葉集」における農作業の「仮いほ」から出発し、「やど」という耽美的な空間を経て、この「方丈記」において、脱俗の意味を帯びた思想的な空間として定立される。それはこれまでの和歌文学における「わがやど」というようなあいまいな情緒的な表現ではなく、「方丈の」という極めて具体的な寸法表現をもった言葉に象徴される、具体的物理的描写によって、日本文学の連続的心象の中に即物的な空間として図像化されるものと考えられる。

「徒然草」の空間評価には、「枕草子」の存在を意識して書かれたと思われるところがあるが、「枕草子」の空間評価が「清新」「華麗」「繊細」「崩れ」であり、季節や状況に応じての「風情」の美学に基づいたものであったのに対して、「徒然草」の空間評価は「簡素」「風格」「調和」「不完全」という言葉で表され、そこには「枕草子」の情緒的に対して主知的な評価が現れている。何が「おかし」であり何が「あはれ」であるかという情緒的な美学ではなく、どういように住まうべきかという人生観が現れている。

表-2.分類別頻度

方丈記										徒然草																
文脈要素										文脈要素																
建築用語					一般名・場所名の					計	建築用語					一般名・場所名の					計					
物・空間を指す語		その他			文脈の役割による分類						物・空間を指す語		その他			文脈の役割による分類										
一般名	場所名	人名	機関名	行為の舞台	行為の対象	美的対象		一般名	場所名	人名	機関名	行為の舞台	行為の対象	美的対象		一般名	場所名	人名	機関名	行為の舞台	行為の対象	美的対象				
建物	86	11	0.00%	1	16	20	61	45.37%	建物	141	133	24	8	103	104	67	306	建物	16.30%	15.38%	2.77%	0.92%	11.91%	12.02%	7.75%	35.38%
部屋	8	0.00%	0.00%	0.00%	6	0.00%	2	8	部屋	41	16	0.00%	0.00%	36	11	10	57	部屋	4.74%	1.85%	0.00%	0.00%	4.16%	1.27%	1.16%	6.59%
部位	13	0.00%	0.00%	0.00%	2	8	3	13	部位	24	2	0.00%	0.00%	1	8	17	26	部位	2.77%	0.23%	0.00%	0.00%	0.12%	0.92%	1.97%	3.01%
部建	7	0.00%	0.00%	0.00%	2	5	7	7	部建	30	5	0.00%	0.00%	20	10	30	30	部建	3.47%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	2.31%	1.16%	3.47%
家具	5	0.00%	0.00%	0.00%	5	0.00%	5	5	家具	74	1	0.00%	0.00%	3	41	30	75	家具	8.55%	0.12%	0.00%	0.00%	0.35%	4.74%	3.47%	8.67%
庭	9	0.00%	0.00%	0.00%	4	3	2	9	庭	159	6	0.00%	0.00%	26	37	102	165	庭	18.38%	0.69%	0.00%	0.00%	3.01%	4.28%	11.79%	19.08%
公空	8	0.00%	0.00%	0.00%	6	6	1	13	公空	13	9	0.00%	0.00%	11	7	4	22	公空	1.50%	1.04%	0.00%	0.00%	1.27%	0.81%	0.46%	2.54%
共同	3.70%	2.31%	0.00%	0.00%	2.78%	2.78%	0.46%	6.02%	共同	13	41	6	30	8	16	60	共同	1.50%	4.74%	0.00%	0.69%	3.47%	0.92%	1.85%	6.94%	
国	1	0.46%	0.93%	0.00%	1	3	0.00%	1.85%	国	13	25	1	28	8	2	39	国	1.50%	2.89%	0.00%	0.12%	3.24%	0.92%	0.23%	4.51%	
都市	12	5.56%	9.26%	0.00%	15	10	7	32	都市	28	17	0.00%	0.00%	19	22	4	45	都市	3.24%	1.97%	0.00%	0.00%	2.20%	2.54%	0.46%	5.20%
里	7	3.24%	2.78%	0.00%	7	6	0.00%	6.02%	里	39	1	0.00%	0.00%	6	21	12	40	里	4.51%	0.12%	0.00%	0.00%	0.69%	2.43%	1.39%	4.62%
其他	14	6.48%	0.00%	0.00%	4	7	3	14	其他	4.51%	0.12%	0.00%	0.00%	6	21	12	40	其他	4.51%	0.12%	0.00%	0.00%	0.69%	2.43%	1.39%	4.62%
計	170	44	0.00%	2	63	67	84	216	計	575	251	24	15	263	287	274	865	計	66.47%	29.02%	2.77%	1.73%	30.40%	33.18%	31.68%	100.00%
	78.70%	20.37%	0.00%	0.93%	29.17%	31.02%	38.89%	100.00%																		

*1 名古屋工業大学大学院博士前期課程
 *2 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)
 *3 名古屋工業大学助手・修士(工学)
 *4 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology
 Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Asst., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.